≪安心院中央公民館 令和1年度 第2回「あじむ学」講座≫

飯田二反田遺跡
～縄文時代後期の集落～

大分県立埋蔵文化財センター
企画普及課　松本康弘

安心院縄文会の名称の由来となりました飯田二反田遺跡の調査について、昨年秋に安心院公民館で話した際に、会誌に掲載するお話をいただきましたので、遺跡から出土した遺物を中心に遺跡の価値について話をします。

1 飯田二反田遺跡の立地

飯田二反田遺跡は、安心院盆地の北東隅にあたり、東から流れる佐田川と西からの深見川に南から北上する津房川が合流する地点にあたります。

宇佐・安心院地域の縄文時代の遺跡としては、早期の別府遺跡・中原遺跡があります。後期の遺跡としては、安心院盆地西にある大仏遺跡、宇佐市の尾畑遺跡などがあり、海岸近くでは立石貝塚、石原貝塚、西和田貝塚などの貝塚が点在しています。

2 飯田二反田遺跡の調査の経緯

宇佐別府道路は、一般国道10号バイパスとして計画された北大道路の一部です。そのうち院内町香下から安心院町佐田に至る8.9㎞については、8か所が埋蔵文化財発掘調査の対象となり、昭和61年度に試掘調査を実施しました。

飯田二反田遺跡については、昭和52年度に圃場整備事業を行っており、当初は遺構の残存は期待されるものではありませんでした。しかし、試掘調査で縄文時代後期の遺物が多量に出土し、住居跡も確認されたことで、にわかに注目される遺跡となりました。

3 縄文時代とは

飯田二反田遺跡が営まれた縄文時代は、弓矢の出現と土器の発明で始まります。弓矢は離れた位置から猪や鹿、鳥などの動物を射ることができました。また、土器の誕生により、食料を煮炊きすることができ、食べられる動植物の種類が広がっていきました。

そして、縄文時代とは今から約1万2千年～2千3百年前の間の約1万年間を指し、土器の形態や文様の変化にみられる文化的画期により草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6期に時期区分しています。

この時代は、基本的に狩猟、漁労、採集を主要な生業としていました。日本には豊かな恵みをもたらす春・夏・秋・冬という四季の訪れがあり、縄文人は季節の移り変わりを素早く察知し、それに応じた生活を営んでいました。例えば、水温み、草木が芽吹く春は、潮干狩りやワラビ、ゼンマイなどの山菜採りの季節です。水温が暖まる夏は、回遊する魚が日本列島に近づく時期で、魚取りの季節となっていました。実りの秋は、主食であるドングリ拾いとイモなどの球根掘りなど一年中の食料を確保するのに最も忙しい時期でした。そして、獣の肉に脂がのり、毛皮も取れる冬は、今も昔も狩猟の季節です。狩りに際しては弓矢を使い、猟犬も飼っていました。また、陥し穴を利用しておびき寄せる狩猟も行われていました。

4 飯田二反田遺跡の縄文時代後期の土器

飯田二反田遺跡では、竪穴建物跡とその周りから多くの縄文時代後期前葉から中葉の土器が出土しています。その文様や器形から、4 つの時期に分けられることがわかりました。

Ⅰ期‥やや幅広い沈線（幅 5～6 ㎜）と縄文による磨消縄文の文様帯に代表される土器群で、縄文時代後期前葉の小池原上層式（鐘崎Ⅰ式）にあたるものです。

Ⅱ期‥Ⅰ期よりも幅の狭い沈線（幅2～3㎜）によって入組文、渦巻文などの文様を描く有文土器に代表される土器群で、縄文時代後期中葉の鐘崎Ⅱ・Ⅲ式にあたるものです。

Ⅲ期‥数条の横走り沈線による文様を主体とする土器群で、縄文時代後期中葉の北九州の下吉田遺跡Ⅳ期土器と呼ばれるものに近い形式です。

Ⅳ期‥深鉢と浅鉢の口縁部と胴部の主要な文様は磨消縄文（疑似縄文）であり、数条の横走り沈線を基本とする土器群で、縄文時代後期中葉の北久根山式にあたるものです。

5 飯田二反田遺跡の縄文時代後期の竪穴建物（住居）跡

飯田二反田遺跡では 5 基の竪穴建物跡を確認しています。その内容はⅠ期の竪穴建物跡が 1 基、Ⅱ期が 2 基、Ⅲ期が 1 基、Ⅳ期のものが 1 基です。九州の北東部で見つかっている同時期の集落は、1～3 基の竪穴建物が検出されていることから、飯田二反田遺跡の住居についても、遺跡が周囲に広がっていたとしても、おおくても同時期に 5～6 基の竪穴建物で構成された集落と考えます。

次に、竪穴建物跡の形態についてです。飯田二反田遺跡ではⅠ期の竪穴建物跡が方形、Ⅱ・Ⅲ期のものが隅丸方形、Ⅳ期のものが円形で、時代とともに形態が変化しているように見えます。しかし、同時期の北東部九州のものは方形、隅丸方形、円形が時代によって規則正しく変遷しません。ただ、Ⅰ期は方形、隅丸方形、円形のいずれもあり、時代が下るほど円形住居が作られる傾向が見て取れます。飯田二反田遺跡の住居の形態はこの変遷の中で行われたものと考えられます。

建物内にある炉については、周辺の遺跡では縄文時代後期前葉は石囲炉が主流ですが、Ⅳ期の頃から、土器炉あるいは地床炉となり、その後は地床炉へとなっていく傾向があります。飯田二反田遺跡でもⅡ・Ⅲ期のものが石囲炉で、Ⅳ期が土器炉となっており、同様の変遷が見て取れます。

鐘崎式土器（かねざきしきどき）

遺跡名：飯田二反田遺跡（宇佐市安心院町）

年　代：縄文時代後期（約 3,500 年前）